



グルーベル院長に贈られた十字架とランバス・ホーム

～ ランバス・ファミリーの故郷からの情報 ～

池田 裕子(学院史編纂室)



創立125周年を記念し、同窓会が実施した「創立者W. R. ランバス博士の足跡を巡る旅～アメリカ南部編～」(2013年10月2日～9日、団長:辰馬勝同窓会副会長)の様子を前号で紹介しました。10月3日にパールリバー教会(ミシシッピ州ジャクソン近郊)で行われたランバス・デイの礼拝に参列した際、ルース・グルーベル院長に贈られた十字架はランバス・ホームの床材から作られたものでした(十字架は、9月28日から大学博物館<時計台2階>で展示される予定です。ぜひご覧ください)。そこで、この十字架制作とランバス・ホームに関する詳しい情報を現地に問い合わせたところ、お返事を頂戴しました。

最初の情報は、旧ランバス・ホームの現在の所有者ハート家からいただいたものです。ご本人の了解を得て、全文を公開します。



Email of November 21, 2013, from Roy Hart to Yuko Ikeda

おはようございます。

私の名はロイ・ハートです。ランバス・ホームに関する疑問にお答えします。私は旧ランバス入植地(現在はハートの地所として知られています)に住むハート家の4代目です。私はここで育ち、今も家族と共に住んでいます。元の土地は分割され、いくつかは売却されました。しかし、私には特別な思いがあります。子どもの頃、ランバス・ホーム(父はいつも「古い家」と呼んでいました)に住む伯母と伯父(キャサリンとレオン・ウィリアムズ)をちょくちょく訪ねました。1960年代、二人は敷地内に新しい家を建てました。それは「古い家」からは少し離れた所でした。その少しあとで、私の両親(ウォルター・ロイとペギー・ハート)も敷地内に家を建てました。私は何度も家の写真を探しましたが、今のところまだ見つかっていません。

伯母夫婦が「古い家」を出てから、「古い家」は修理不能になりました。正確な日付は覚えていませんが、1970年代初めか半ば、危険と父が判断し(今にも崩れそうでした)、取り壊しました。解体中、私は現場で多くの時間を過ごし、当時の道具により家がどのように建てられていたか確かめました。『古い家』は、パールリバー教会のすぐそばを流れるパールリバーで伐採されたサイプレス(イトスギ、セイヨウヒノキ)で作られていた」と父は何度も話していました。「古い家」のオリジナルの木材で今も残る唯一のものは、父が1970年代に建てた新しい納屋の一部に用いられたものです。納屋の屋根裏には「古い家」の板材と床材が使われました。元の敷地は80エーカーもあって、パールリバーの川岸から続いていたのですから、それはもったもなことと思われます。「古い家」からパールリバー教会や川までは比較的容易に歩けたと父は語っていました。

大きな木材と床の根太の品質と強度を確保するため、川のそばで、製材用のこぎりを使って作られたようです。角のジョイント部分(ほぞ穴とほぞによるジョイント)に切れ込みを入れ、穴を開け、木釘で止められました。「古い家」の建築のためには、板材/木材を水にすっかり浸すか(膨張させるため)、若い板材を使う必要がありました。そうすると、乾燥した木釘を固く打ち込むことができるのです。一旦乾燥すると、木釘は決して抜けず、ジョイント部分は大変強固になりました。大きな木材には膨大な手仕事が必要でした。現在残る最大のもの、高さが約18から20フィート(540から600cm)あり、幅は3フィート(90cm)あります。長さは最大約20フィートまで様々です。木材と床材の多くには手斧目が見られ、それぞれ注意深くジョイントされていました。その「場」で使われたものではないと思いますが、私は今も手斧と二人で使用しているこぎりを持っています。さらに、「古い家」から回収された角釘が巨大なバケツいっぱいありました。私はこの釘を探しましたが、見つかることができませんでした[ハート家には残っていないようですが、実はこの時回収された木釘や角釘は、わずかながら学院史編纂室が保管しています]。





「古い家」とのつながりを長く保つため、私は同じ板材とできるだけ自然なままの木を使って「古いテーブル」を作りました。十字架はランバス・ホームの床の根太に使われていた大きな板材から作られました。十字架をデザインしたのも制作したのも私ではありません。ですから、この件に関しては何の情報も持ち合わせていません。しかし、私が提供した板材で美しい十字架が作られたことを大変嬉しく思っています。

最後に、かつてランバス・ホームの正面にあった桑の木は今も敷地内にあります。それは極東から運ばれ、ランバス・ファミリーによって植えられたと私は理解しています。その木の写真を撮って、次のメールでお送りしましょう。

ご質問に対する答えになったでしょうか。さらに必要な情報がありましたら、いつでもご連絡ください。

ロイ・ハート

テーブル【上】と十字架【下】の写真はロイさんが提供してくださいました。



Email of November 21, 2013, from Rev. Jim Genesse, Senior Pastor, Madison United Methodist Church, to Yuko Ikeda

ランバス・ホームとランバス・デイの時に贈られた十字架に使われた木材に関し、ロイ・ハート氏からメールを受け取られたことと思います。ロイとそのご家族はマディソン合同メソジスト教会のメンバーです。彼は歴史と木工を趣味にしています。十字架は、同じく教会員のジム・ミラー(Jim Miller)氏が制作しました(奥さんのジョニーは合同メソジスト教会牧師の姉妹です)。ミラー氏は熟練した木工家で、十字架は彼自身によるデザインです。木材は全てランバス・ホームのもので、ロイによれば、サイプレス床だったそうです。色の違いは、ミラー氏の仕上げの違いによるものです。十字架とランバス・ファミリーに対し、このように深い関心をお寄せくださったことに御礼申し上げます。関西学院の兄弟姉妹の上に神の祝福がありますように。



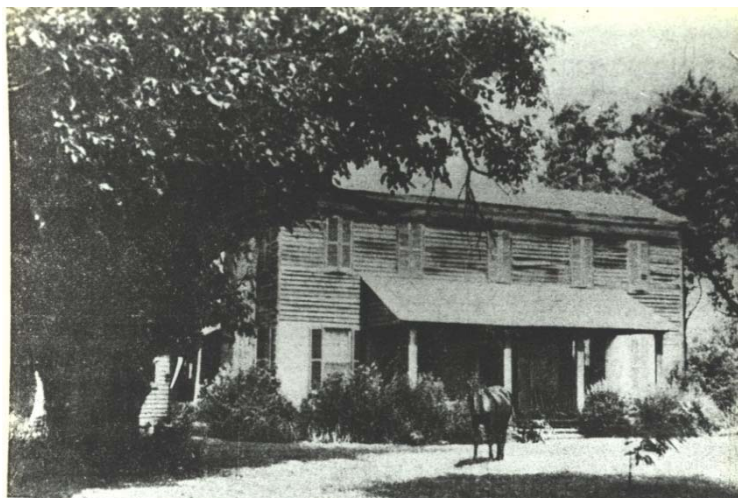
ジム



ロイ・ハートさんが見つけれなかった旧ランバス・ホームの写真ですが、学院史編纂室には10年程前にミルサプス大学アーカイブズのデブラ・マッキントッシュ(Debra McIntosh)さんから頂戴したものと【写真下、典拠不明】があります。ロイさんにご覧いただいたところ、「まさに記憶の中の家そのものだ」とおっしゃいました。家の前に茂るのはランバス一家が極東(この記事では「日本」となっています)から持ち帰ったと伝えられる桑の木です。ランバス・ファミリーが中国や日本から持ち帰った苗木は一族や関係者の家々に植えられたと聞いています。

1975年5月29日付 *The Madison County Herald* 紙は、その時点でランバス・ホームがまだ存在していたことを報じています。同紙によると、家の前に植えられた桑の木はランバス一家が中国から持ち帰ったものだそうです。2つに分かれた幹の片方はその頃折れてしまったようですが、もう片方は生き残っていると伝えています。

先のメールに、現在の桑の木の写真を撮って送ると書いてくださったロイさんは、立派に成長し、見事な葉を茂らせているこの木の故郷がどこであるか、ミシシッピ州立大学に調査を依頼中であると連絡してられました。写真と調査結果の報告が待たれます。



OLD LAMBUTH HOME: Here lived the Lambuth family, down in southwestern Madison County, more than 100 years ago the Rev. James William Lambuth was the Mississippi Conference's first missionary to China. The great tree in the left foreground is a Japanese tree brought back by the missionaries. This is now the home of the Hart family. *Mulberry tree*